知らない人

太宰治

青空文庫

ことしの正月は、さんざんでありました。五日すぎから、腰の右方に腫物ができて、粗末にしてゐたら次第にそれが成長し、十五日までは酒を呑んだりして不安の氣持をごまかしてゐましたが、たうとう十六日からは、寢たつきりになつてしまひました。惡寒疼痛、二、三日は、夜もろくに眠れませんでした。手術は、いやなので無二膏といふ膏藥を患部に貼り、それだけでも心細いので、いま流行してゐるらしい、れいの「二筒のズルフオンアミド基」を有する高價の藥品を内服してみました。葡萄狀球菌、連鎖狀球菌に因る諸疾患にも卓效を奏するといふことだつたので、私は、それを、はじめて二錠服用したときから、既に恢復の一歩を踏み出したやうな爽快を覺えました。私は、賣藥の效能書を、實に信用する愚かな性質を持つて居ります。その、「二箇のズルフオンアミド基」を有する高級化學療法劑に就いては、かねて新聞廣告に依つても承知してゐたのでありますし、いま自ら購ひ求めて、藥品に添附されて在る一枚の效能書をつくづく眺め、熟讀して、腰の腫物を忘却してしまふほど安心したのであります。效能書に依れば、これは、たいした藥なのであります。世界を驚かした大發明なのであります。私は、ここでその藥品の廣告をするつもりでは無いから、くはしくは書きませんが、實に種々雜多の難病に卓效を奏する藥なのであります。もう、これでなほつた。腫物が、なほるばかりでなく、肌がなめらかになり色が白くなるかも知れない、と家の者に冗談を言ひ、靜かに横臥し、藥のききめを待つてゐました。二錠づつ、一日三回服用すると、たいていの腫物は、なほるといふ效能書の言葉だつたのですが、二日服用しても、三日服用しても、ちつとも輕快になりません。おなかが變に張つて、ごろごろ鳴ります。胃に惡い藥のやうです。三日服用したら、あと服用を禁止せよ、三日乃至五日間休止して、それからさらに二錠づつの服用を開始せよ、と效能書に書かれて在りましたので、私は、少しも、ききめの無いままに、その藥の服用を、やめなければならなくなりました。すでに私は、三日間、服用してしまつたのです。甚だ、味氣ない思ひでありました。腫物はいよいよ發展し、いまは膏藥では間に合はず、脱脂綿に無刺激の油藥を塗つて患部に貼りつけ、日に五、六回も貼りかへなければなりませんでした。膿が、どんどん出るのです。その狀は、流石に形容を遠慮しますけれど、とにかく酸鼻の極でありました。お銚子の底くらゐの大きい深い穴が腰にぽつかりできてしまつたのです。入院、といふことも考へましたが、それでも、やはり心の奥底で、かの高價な「二個のズルフオンアミド基」を有する世界的な新藥を、たのみにしてゐるところが在るらしく、そのうち卓效を奏するであらうと、身動きもならず靜かに横臥して、天に祈る氣持でありました。服用休止の三日間が過ぎて、さらに私は藥品の服用を開始しました。いたづらに膿が流出するだけであります。患部を見ると、あまりの慘狀にくらくら眩暈を感じます。腫物で死ぬ奴も無いだらう、などと強がりを言つて、醫者に見せようともしませんでしたが、どうも、夜半ひとり眼覺めて、いろいろのことを考へると、なかなかに心細くなるのでした。寢ついてから、もう十日以上になります。いまは、膿も、あまり出なくなつて、からだも輕くなり、かうして床に腹這ひになり原稿を書けるやうになりました。だんだん、よくなつて行くのでせう。やはり、「二個のズルフオンアミド基」のおかげなのでせうか。それにしても、ずゐぶん緩慢な卓效ぶりであります。全

快までには、まだまだ相當の日數がかかるやうな氣がします。私が、あまり有頂天で效能書の文句を信じ過ぎたのでありませう。現實は、たいてい、こんなものではないでせうか。この世に、奇蹟なんてものを期待した私は、ばかであります。

十日間、寢たままなので、ずゐぶん本を讀みました。なんでもかでも、選擇せずに讀みました。惠送された同人雜誌も、全部讀破しました。一つ、心に殘つた記事があります。第一早稻田高等學院の「學友會雜誌」に、K教授の追悼記が載つてゐました。K教授といふ人は、どんな人だか、私はちつとも存じません。逢つたことも無し、また、名を聞いたことさへありません。けれども、その雜誌に載つてゐる四つの追悼記を讀んで、實にその人を、なつかしく、惜しく思ひました。こんな美しい人も生きてゐたのかとほのぼの樂しく、また、もうこの人も、なくなつて、お逢ひできる望みは、全く無いのだと思ふと、胸ががらんどうになつて侘びしく、變な氣持でありました。四人の人が、追悼文を書いてゐるのですが、その四人の人の名も、私は知つてゐません。四人とも、早稻田の先生なのでせう。私の知らない人ばかりですが、なかなか巧みに書いて居ります。追悼文を讀み、私のやうに故人を全く知らぬ男にさへ、故人に對して追慕の念を懷かせるのは、それは、きつと追悼文の誠實さであり、またその追悼文の筆者の故人に對する深い愛情の證據であると考へられますが、また、それだけ故人の德の深さをも思ひやられるところが在るのであります。つまり、故人の德の深さが、このやうに友人たちに、美しい追悼文を書かせた、といふ交互相照の作用を考へることもできるのであります。私は、終りのはうから逆に讀んで行きました。一ばん終りには、Y・Tといふ人が、「K君は歩きながら語り合ふ樣な人であつた。さし向つて話すときでもお互ひにそつぽをむいて話した。それが大變に氣持よかつた。そして默つたままでゐても氣持が良かつた。」と書いてゐます。また、「勢ひこんで議論を吹きかけるとK君は大抵だまつて、ものの十秒も考へてから言ふのである。君の言ふことも、さう、そんなこともあるよ、とK君は獨特のアクセントで言つてたいてい贊成してくれる。K君は氣の弱い人である。恐らく澤山の人がK君を輕んじてゐたと思ふ。それは全く、はたで見てゐて齒がゆくなる程であつた。K君は決して他人の惡口を言はない。他人の批評をしない。決して蔭口をきかない。けれども、厭なもの、くだらぬものの傍は默つて通りすぎる人であつた。云々。」とその他たくさんのいいことを書いてゐるのです。M・Kといふ人が、その前の頁に書いてゐます。「實際あのひとの慇懃鄭重は、生れつきだつたらしい。幹部候補生を勤め上げて、騎兵少尉になつてからのことだ。どこかへ演習に行つての歸る時、集合命令をかけたが、雜談に餘念のなかつた二三の部下に徹底しなかつた。つかつかと歩み寄つたK少尉、いきなりびんたの一つも張るかと思つたらさにあらず、『それ位にして置いて早く集つて下さい、濟まんが』とやつたものだ。部下は飽氣にとられる。側にゐた上官が、そんなことで威嚴が保てるか、と眞赤になつてK少尉の肩を搾つたといふが、Kさんは、そんな人だ。決して威張れない人なんだ。それでゐて結構つよい半面もあつて、學問上の議論となると、なかなか讓らない。我武者羅に押通さうものなら、默つて聽いてはゐるが、『さういふけどなあ』とねちねちやつて來る。言ひ出したら引かない。しまひには辭引を出して來る。參考書を引張り出す。さうなつたら大抵の場合、こちらの敗けだ。よく讀んでゐる

からなあ。」と書いてゐます。また、「本當の意味のユーモアは、K君の持味だつた。輕口を言はず、駄洒落を飛ばさないから、K君をユーモリストだと誰も思はないけれど、挨拶をさせたり、序文を書かせたりしたら、K君のものは天下一品だ。少し長すぎるなと思つても、結構、しまひまで附合ひさせる面白さがあつた。微笑は、する者にも見る者にも、上品でよいものだ。そんな輕い微笑をK君は絶えず人々に、そつと投げかけてゐた。だからK君のゐる傍は、いつも和やかな春風が吹いてゐた。云々。」その前の頁には、D・Eといふ人が、「彼には、自分が生きるために、止むを得ず他の人間を喰物にするなぞといふ事は、誠に思ひもよらぬ事の如くであつた。氣づかぬふりして人に迷惑をかける、なぞといふ事は絶對に彼の本性が許さなかつた。彼は實に不便な思ひをしながらも、最も人に迷惑をかけないやうな身の置き所から、身の置き所へと、恰も飛石づたひのやうに拾ひ歩かなければならなかつたのである。」と愛情を以て説明して居ります。また、その前の頁には、T・Iといふ人が、「變な言ひかたかも知れないが、Kさんは、ほんとの聲を出す人であつた、さうしてほんとの聲しか、出さない人であつた。君が純眞率直で自己を僞れない人であつた他面に、さういふ人に時々見掛けられる他の人に對する冷酷さといふものが殆ど無く、反對に優しい心根の、先輩に對しては極めて謙讓な、實に美しい性情の持主であつたことは、矢張り君の自己教養の深さから來たものではないかと思ふ。」と書いて、その實例を三つ四つ、引いて在るのです。實にK氏は、いい人だ、できた人だ。こんないい人が、どうして死んだのだらう、と追悼記の一ばん前の頁をひらいて見ると、そこに、學院長K・Mといふ人の弔詞が在ります。「第一早稻田高等學院教授陸軍騎兵中尉K・K君逝けり。君は昨年九月召に應じて征途に就き、南支バイアス灣上陸軍に加はり、廣東攻略戰に參加して奮闘せしが、幾ばくもなく病に罹りて、戰線より後退するの止むなきに至り、爾來臺灣に、後廣島に加療し、更に東京日本赤十字病院に轉じて、只管に健康の恢復に力めしが、天無情にして齡を君に假さず、客月二十九日、痛ましくも終に不歸の客となれり。云々。」と書いてありましたので、私は、なんだか、寢床に起き直りたい氣持になりました。

小さい、美しい奇蹟を、眼の前に見るやうな氣がいたしました。奇蹟は、やはり在るのです。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集11」筑摩書房
　　1999（平成11）年3月25日初版第1刷発行
初出：「書物展望　第十巻第三号」
　　1940（昭和15）年3月1日発行
入力：小林繁雄
校正：阿部哲也
2011年10月12日作成
2011年12月13日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

知らない人

太宰治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/